武州世直し一揆 百五十周年記念集会

戸谷 克己 著

―明治維新の二年前に飯能の地から始まり武州・上州の広域に渡って瞬く間に広がった 参加者が十数万人に上った「武州一揆」は高度な倫理性と共同性に貫かれた「世均し」＝「世直し」を求める闘いだった

去る六月十一日（土）に、飯能市市民活動センター・ホールで、「武州世直し一揆百五十周年」を記念して、「説教節と講演の集い」が持たれた。「武州世直し一揆」とは、明治維新の二年前の慶応二（一八六六）年六月十二日に、名栗・吾野・成木の民衆が「世直し」を呼号して、飯能川原に集結するところから始まり、僅か七日間の内に武州・上州等一帯に広がった、豪商や豪農に対して、米の安売り・施金・施米、質地・借金証文の廃棄等を求めて、十数万人にも上る人々が参加・結集した運動＝蜂起のことである。明治以前は旧暦（太陰暦）を使用していたため、六月十二日は現在（太陽暦）では七月の半ば頃から終わり頃の間のことであったと思われるが、そのままその月日を銘じて「武州世直し一揆百五十周年」の顕彰の集いを持ったのであった。

慶応二年の歳は、その八年前に米欧諸国の圧力の元、それらの国との間に「修好通商条約」等を結ばされて横浜等の開港を余儀なくされて、日本の良質の金貨や銀貨がそのまま金や銀として米欧に流出することになり、幕府はそれを補うために悪貨を鍛造することになって大幅な物価騰貴を招来し、折しも長州再征伐用の兵糧米の徴発による米穀の不足から米価が高騰し、更に悪いことは重なるもので、シベリヤ寒気団が夏まで居座り続け、桑や麦は霜害（冷害）によって収穫は見込めず、畑作や養蚕や山稼ぎ（杣・樵）を主な生業としていた人々に飢饉が迫っていたのであった。そのために、名栗村周辺の窮民は、飯能等の在郷商人に対して、米穀の安売り、施米・施金、質物・質地の無償返還等を求めて交渉を重ねたものの決裂に至ったために、最終的には同志達との密議の果てに、それらを豪農や豪商に対して要求し実施させる蜂起＝一揆を企画して、周辺の山や谷沿いの村々にオルグを派遣して、廻状や「言い継ぎ」によって、蜂起の日時や隔日・広域・多発といった手法に基づく一斉蜂起へと傾（なだ）れ込んでいくことになったのである。

「武州世直し一揆」は、地元では「ぶっこうし」と呼ばれているように、民衆から不当な収奪や搾取等の手段によって富の蓄財を図って来た浜（生糸や茶等の外国との貿易に携わった横浜稼ぎの）商人・高利貸・穀商人・地主等の富の偏存を正すべく、「世均し」＝「世直し」のために施金・施米や質物返還等を要求し、それに

対して応諾しない場合には、彼等の家屋を初めとして生産用具・商品。日用品に至るまで全てを「打毀し」をすることを目的に闘われた運動であった。この運動＝一揆は、各村々の十五歳以上六十歳までの男衆全員の参加を義務付け、農具・工具・伐採具等の日常の生業に用いている「斧・鋸・かけや・鎌・得物」を持参することを求めて、「打毀し」に当たっては、「刀脇差し等」の「持参」を禁止していたように、一切の殺傷行為を禁じると共に、富商や富農のお金・穀物・家財・物品等を窃盗し私的に流用することや放火を禁ずる、厳しい倫理性に基づいた規約や戒律の元、実行に移されていったのだった。そのために、一揆勢は要求に応諾しない富裕な家々で見付けた食物や現金等をわざわざ周辺の路上に撒き散らしたり放置したりして、その周辺の貧しい人達が拾って手に入れられるようにしたり、誰も利用出来ないように富者の家財の一切合切を打壊したり井戸の中に投げ捨ててしまったりといった対応を取ったりしたのであつた。

この運動＝一揆は、瞬く間に燎原の火の如く広がり、当初予定した通り日を置いて順々に、飯能・所沢・青梅・拝島、毛呂・越生・寄居・本庄・秩父大宮・小鹿野、八幡山・藤岡・新町といったように、武蔵国十五郡・上野国二郡に渡って次々と拡大し展開されていったのであり、打毀し軒数四百六十戸、参加者は武蔵・上野の他、相模・下野・常陸等の出身者を含めて十数万人にも及んだのであつたあった。当然、運動＝一揆の常で、鎮圧のために動員された幕府軍と豪農層によって組織された階層的結集としての農兵による銃と砲による武力鎮圧は凄惨を極めて、武器の携帯を自ら禁じて盟約して参集して来た一揆の人達に襲いかかり、抵抗する手立て＝武器を初めから持っていなかった小作貧農層や周辺村落から流入した没落貧民等の宿駅・宿町の日傭層は蹴散らされ、「世均し」＝「世直し」を求めた運動は、六日間の闘いの後に壊滅することになってしまった。でも、この一揆そのものは、幕藩体制がその二年以内に崩壊していくことになるように、当時の幕藩体制が抱えていた矛盾や問題を根元から明らかに示すものであったことは確かなことであるだろう。

この集会の前半に、「武州一揆」当時に流行していた説教節の『佐倉義民伝』が三代目若松若太夫によって語られたが、その語りの部分を理解し易くするために、『佐倉義民伝』を扱った車人形（三人遣いの人形浄瑠璃を、車を使って一人でも遣えるようにした。）の写真が脇に映されていたが、当時一揆に参加した多くの農民や貧民が、このような『佐倉義民伝』の車人形や説教節によって、自分達の闘いや決起の理＝正当性というものを鼓舞されて、運動＝一揆に馳せ参じていったということが、その語りや映像を通して聞く者の胸に滔々と響いて伝わって来た。江戸前期に佐倉藩の重税に抗して将軍に直訴して妻子と共に処刑された佐倉宗吾（歌舞伎に初めて取り上げられるのは嘉永四 ―一八五一年で「佐倉惣五郎」という名で出て来る。）の事績は、やはり幕府の政策によって同じような厳しい経済状態＝生活状態に追い詰められていた貧窮した農民や町民の共感や支持を受けることになっ

たのであり、「武州一揆」に馳せ参じて来た人々の胸には、この説教節や車人形の場面や音階が鳴り響いていたのであろう。この運動の様々な規約や戒律に示された高い倫理性と平等な世界を求める精神性としての共同性は、明治十七（一八八四）年に起きた秩父困民党による負債年賦返済や租税軽減等を要求した秩父事件にも連綿と繋がっていくことになるのであり、この「武州一揆」の武力による壊滅という体験が、逆に反省的に武装蜂起というものに繋がっていったと、私には思えるのである。そのような意味で、地元においては「秩父」や「名栗」の暴徒が切っ掛けとなった暴動としての「ぶっこわし」として受け取られていて、不名誉な歴史としてタブー視される傾向にあったが、私達はこの「武州一揆」を今こそ価値化して、人間らしい共同性としての「世均し」＝「世直し」を希求した民衆の運動として顕彰し、その高い倫理性と精神性＝共同性というものを後世に伝えていかなければならないのだ。

（戸谷）